往時の風味をたっぷり宿すカバー式のセンターキャップ構造を採用。剛性感とメタル感を灯す質高いペイントも相まって、古格ある十字スポークが誇らしげな表情を浮かべているのだ。先代社長の遺志がここに受け継がれた。

Back to 1990 EQUIP Competition Model

このトライアンフ“ワーク・プライド”TR3Aに違和感を覚える、いや怒りすら感じるオールドファンがいるかもしれない。あたら名車のボディを切り刻んで当世風アレンジを効かせるなど冒涜だ、と。だが、心配しないで頂きたい。車体各部を連結するボルト（リベット？）を丁寧に取り外してワンオフされた前後オーバーフェンダーに換装しているだけ。唯一傷つけたのはロールバーを装着するためのボルト穴のみ。

では何故、そんな面倒なレストア×モデファイを敢行したのか。それを語るには、ワークのフランス人プロダクションマネージャーである、Jean-Christophe Pepino氏（愛称JC）にご登場を願わなければならない。彼が手掛けたのはワーク伝統の金看板、エクイップ。アフターホイールの礎を築いた先代が趣味で秘蔵していた名車が遺されていることを知り、ワーク創立40周年を迎えた記念すべき今年、再び火を入れようと決意したのだ。

もちろん、単なる行事を盛り上げるアドバルーンとしてではなく、先代の遺志を継ぎ、今を生きる若者に未来を生きる子供に、自動車遊びの楽しさを伝えていく、継承作業として。純正部品はほぼ現存せず、レストアは幾度も頓挫しそうになったと聞く。だが、実作業を担当したワーク車両部のレストアラー、牧野直哉氏はJCの熱い想いをひしと汲み取り、根を上げることなく、ついには完成へと漕ぎ着けたのだ。

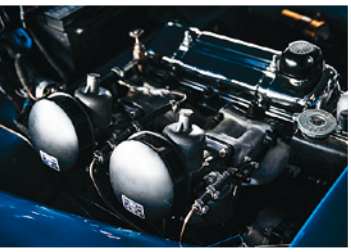
そんな、ワーク全社員の希望と願いが詰まったトライアンフの足元を飾るのにふさわしいのは、同じ匂いがする1990年代のフォーミュラレースで活躍していたスポーツホイールの意匠こそ。誕生、エクイップ40。精悍な十字スポークが醸す古格あふれる味わい、走りの原点であるスモール＆ディープリム、クラフトマンシップ息づく個性的なステップリム。ワークが40年間紡いできた存在意義が、余すことなく注がれている。

レースで培われたEQUIPの哲学。

エクイップ40の原型となったレーシングホイールが活躍していたのは、1990年代に開催されていたフォーミュラ3やフォーミュラ4でのこと。メインチームはToda RacingとYellow Hat、Toda Racingは4スポーク仕様が廃盤を迎えた後は5スポーク仕様へと変更した。ワークに息づくレーシングスピリッツは先人から後輩へ脈々と受け継がれていき、今へと至る。それもまた、先代社長の遺志であり希望でもある。ワーク40年のレガシーがここに。

「40年の時を経たワークのアイデンティティを封入。」

趣旨に賛同した鋲打ちオーバーフェンダーの伝道師、TRA京都の三浦代表が渾身を込めて描き切った前後オーバーフェンダー。F=8R=9.5J×15インチのエクイップ40を楽々と飲み込む魅惑の四肢っぷり。カニ目も大満足だろう。



2017 EQUIP 40
1960 Triumph TR3A

2017 EQUIP 40×1960 Triumph TR3A
WHEEL SIZE:F=8.0J×15-15 R=9.5J×15-25
TIRE:Hoosier R7 (F=225/45-15 R=245/40-15)
Front Spoiler&Over Fender (F=50mm R=70mm)
Made by MIURA T.R.A